

大和言葉の磁力

桑原 正紀

近ごろ短縮形のことばがやたら増殖しているように思われる。背景には電子メールやライン、チャットといった通信手段における簡略表現の需要があるのだろうが、短く表現することで生まれる利便性、スマートさもたいせつな要素になっているようだ。「コスモス」の本号から。

子が置いてゆきたる書架の卒アルや学習図鑑に冬の陽しろし
伊沢 玲

卒業アルバムを「卒アル」と言うのは、作者の子どもの世代であろう。作者がそれを用いることで、子どもの感覚に寄り添っている感じが出ているところがいい。

実はこうした言葉の短縮ということは、昔から日本語の持つ傾向としてあるもので、何も現代に始まったことではない。古くは仏教が伝来したときに、「仏陀」は「仏」、「菩提薩埵^{ぼつた}」は「菩薩」、「文殊師利」は「文殊」などと馴染みやすい短めの音数で流布した。江戸期においても、紀伊国屋文左衛門は「紀文」と言ったり、さらに昭和期にも

榎本健一は「エノケン」、嵐寛寿郎は「アラカン」という愛称で呼ばれた。これらはほんの一例で、言葉の短縮は広く流布することと関係した伝統的な現象である。

現代で目立つのは、日本語化した外国語の例であろう。

「ロケ」「アルミ」「マイク」「プログ」「スマホ」「コンビニ」「スパー」「リモコン」「リハビリ」などのように略語という自覚もなく使っているものから、いちいち調べないといけないものまでたくさん流通している。

なお、これらの略語はすべて二音から四音で、大和言葉の自立語はほぼ二音から四音という原則と符合する現象となっている。大和言葉の一語の音数には、かなりな磁力が存在していると言えそうだ。実は短歌のベースである五音七音もこの磁場の中で成立した音数であると考えているのだが、それはまた別の機会に述べてみたい。

ともかく、外来語など長くて面倒な言葉も、本来の大和言葉の音数にしてしまえば、違和感なく落ち着くというわけである。今後もこの種の略語はどんどん殖えていき、短歌にも登場することだろう。

最後に、略語を思いきり生かした作品を紹介する。

推し活をしてる陽キャの同僚は推しのプロフにエモキ
ユンしてる
水上 美季

オススメのサブスク一覧スクショして従姉妹に送る
「あとはググって」